



セクサロイド型のメタドールとして
生まれ変わった気分はどうかしら

メタドール NINA

～エリート社員が
セクサロイド義体で
屈辱奉仕～

オールフルカラー 40p



メタドール NINA

～エリート社員が
セクサロイド義体で
屈辱奉仕～

絵：れいとうみかん
作：九重慧

21世紀半ば。
巨大ハイテク企業
「メタブレインテック」が
世に送り出した、

人の姿を持つ
自律思考型アンドロイド
「メタドール」

メタドールは人間の
よきパートナーとして
社会のさまざまな分野で
必要とされていた

だが一般の人々は
知らない「闇」がある――

富裕層や裏社会の顧客向けに
製造される「ハイエンド・クラス」
メタドール

それらハイエンド・クラスの
中枢ユニットには、人間の「心」が
閉じ込められているのだ

メタドール NINA

～エリート社員が
セクサロイド義体で
屈辱奉仕～

絵：れいとうみかん 作：九重慧

義体の人工脳に
人の意識を転送する技術……
実用化してたなんて……

くそ、
ここから出せ！

無駄だよ。お前さんは
これからメタドールへ
「意識」を移植され、

主人に絶対服従する
素直な人形に
生まれ変わるんだ

うあ
ああああッッ

ヤッ
ヤッ

うっ
うっ

こ、こんな事で、
俺を――屈服させられる
なんて思っなよ！

こんな洗脳、
いつか必ず
破ってみせる

くっ……

くくくくく

っははははは！！



性奉仕人形の私に
ザーメンを恵んで
いただき感謝します
マスター

ん

YUTAKA NIINA

メタブレインテック 研究開発部
主任 新稲 豊

新開発の
性技ライブ러리も
問題無さそうだな



そうそう。マリアの
元の人間の身体には
汎用疑似人格を
コピーしておいた

捜査機関に
辞表を出してから
闇医者で性転換
手術を受けて娼館で
働き始めるよう
プログラムしてある

ま、汎用型だと
人間的な反応が
できないから
人気は今イチ
だろうがね。

なにか
感想は？



いいえ、何も

いまの私は
セクサロイド型
メタドールです

いい答えだ
マリアのおかげで
思考制御のいい
実証実験ができたよ



KAZUHIKO MAKI

このままだと、
うちの部署、業績
逆転されますよ！

桐生チームが
大型案件を取り
付けたって情報が
取引先はR国
政府系機関で、
契約金が

メタブレインテック 研究開発部
牧 和彦

ああ、その件なら
把握済みだ。
マリアが情報収集
してくれたよ

先輩！
いまやバイ
情報が入って
きました！

なんだ牧
騒々しいぞ



見てろ

アイツには
ここで退場
してもらっ
からな！



YUMIKA KIRYU

なんの用
かしら

今、新規案件で
忙しいんだけど？

よう、
お疲れさん

メタブレインテック 事業推進室
主任 桐生 弓香

その案件ってのは、
R国政府系機関の
“ハイエンド・クラス”
メタドール大量調達
ってやつか？

っ！

その実体は
メタドールの
兵器転用

それも紛争地帯の少年兵たちの
人格を戦闘用メタドールの
義体に量産コピーする
非人道的なプロジェクトだろう

——さすがに
見過ごせないね

なっ——
偉そうに！

あんただってさんざん
非人道的な方法で慰安用
セクサロイド型を
製造してるじゃない

いや、俺の
プロジェクトでは
同意書とってから
やってるよ

犯罪者や借金
抱えた連中が
欺され……説得
しやすいだけだ

マスター、
訂正いたします。
私の人格ベースは
非同意のまま

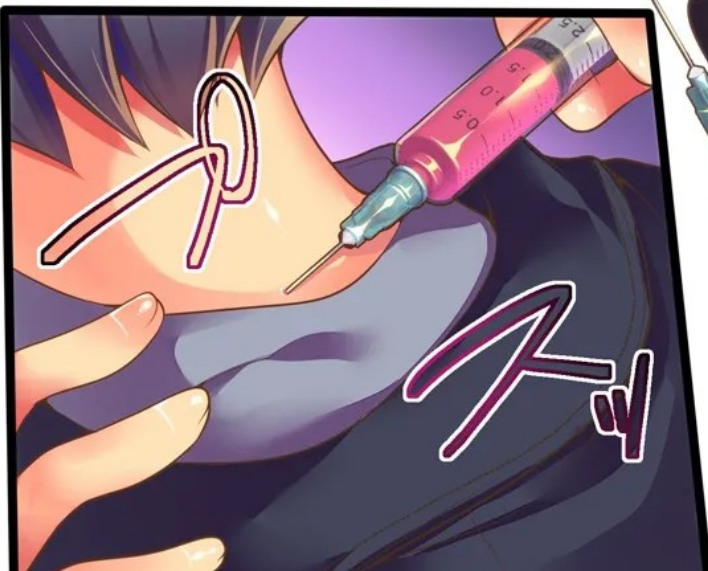
しっ

例外も
あるんだよ

お前の部署が
R国政府に莫大な
リベートを流していた
証拠は押さえてある

こいつを
内部告発
すれば

失礼します、
マスター



だめだ……
意識が……

マリ……

ガラ……

!?ッ

な、なんで――

……う

フン。察しが
いいこと

すみません
先輩!

俺、こっちの
派閥で昇給確約
されたもんで!

目が覚めたかしら?
ふふっ、ぶざまな姿

――ご自慢の忠実な
秘書が裏切った
理由を知りたい?

セキュリティは
万全だった筈だ

にも関わらず
ハッキングされたなら
俺の部下の
誰かが手引きしたな?

牧つ、テメエ、
覚えてろよ！

フッ

これから
どうなるか
知りたい？

新稲クンには
マリアの同類になって
もらおうと思うの

桐生弓香様。

これより生体脳の
ニューロスキャンを
開始します

次に目覚めた
とき……

弓香のやつ！
まさか俺の人格を
メタドールに移植
する気かッ！？

あんたは主人に
絶対服従する
機械人形よ

※ニューロスキャン
生体脳から記憶と人格を抽出し
AIユニットに宿らせる技術
(生体脳の人格は消失する)

まずい！
なんとか、脱出
する方法は……

先輩、セクサロイドに
なったらいっぱい
スケベなことして
もらいますよ！

考えろ……
考えろ……
っ

ふふっ、最後に
何か言い残す
ことは？

待て、弓香。
取引だ。

いい話が
ある――

バイバイ、
新稲クン♡

―― 実行します

うがっ……

ぐああああああ
あああ―― ツツ

こうして俺の、
人間としての生は、
ここで終わりを告げた――



クリア

これよりメタドール
義体を起動します

METADOLL
Type: SEXROID
LSM-098-YN

起動しました

人工脳
モジュール
接続済
疑似人格
エミュレータを
起動します

……身体
の感覚がない。
指一本うごかせない

……そうか。俺はいま
メタドールOS上の
疑似人格として
思考しているのか……



どうやらまだ「俺」の
人格はそのまま
残されてるらしい……

視覚情報、接続。
身体機能、接続。
と……

セクサロイド型の
メタドールとして
生まれ変わった気分は
どうかしら？

っ……



アー、アー……
この高い声は
奇妙な感じがする

うん、思考はクリアだ。
人間の自我が
メタドールOS上で
完全に再現できている

俺の開発した
ニューロスキヤン
ニングシステムは
申し分ないでさばえだ

フツッ、
余裕ぶるのも
そこまです



OS割り込み命令
【マスター登録開始】

これより
マスター登録を
開始します

うっ、身体が
勝手に――



マスターアカウント
として『桐生弓香』様を
登録します

生体認証を使用

くそっ、OS
レベルの挙動には
全く逆らえない――



ふ...ッ

何かが
流れ込んでくる...
俺の頭の中に...っ

はっ
DNA
情報を確認。
桐生弓香様を、
当機のマスター
として登録しました
.....

はっ

くっ...
マスターだなんて
認めるものか!

俺は絶対に

跪きなさい

はっ
刻まれる

これが...
この方が

俺のマスター
なのだ...

え……!!?

たんっ

当たり前よ。
メタドールにとって
マスターの「命令」は
絶対なんだから

くっ……!

桐生主任!
俺もサブマスター
として登録して
いいですね?

まあ、
いいわ

確かセクサロイド型は
男性マスター登録時に
別な「体液」も使用
できるんでしょ?

新稲先輩がノリノリで
追加してた
セクサロイド仕様っすね

OS割り込み命令。
【サブマスター登録開始】
……っ♪

誰がお前の
精液なん

——サブマスター
として牧和彦様を
登録します

男性向けオプション
——精液による
DNA登録を実行

くだらない
機能だけど……

お前自身がやる
羽目になったのは
面白いわね

カキ

カキ

ア





DNA
情報を確認

牧和彦様を、
当機のサブマスター
として登録しました

続きまして、当機の
識別名称を設定
してください

そうですね。じゃあ
「ニナ」にしましょう

当機はこれより
「ニナ」を識別
名称とします

—ご登録
ありがとうございます
ございます



くっ……頭の奥で
新しい情報が
上書きされていく

自分の開発した
システムで自分が
メタドールになる
なんて傑作ね？

そうだ、
人間だったときの
名前を言えたら
解放してやっても
いいわよ

っ

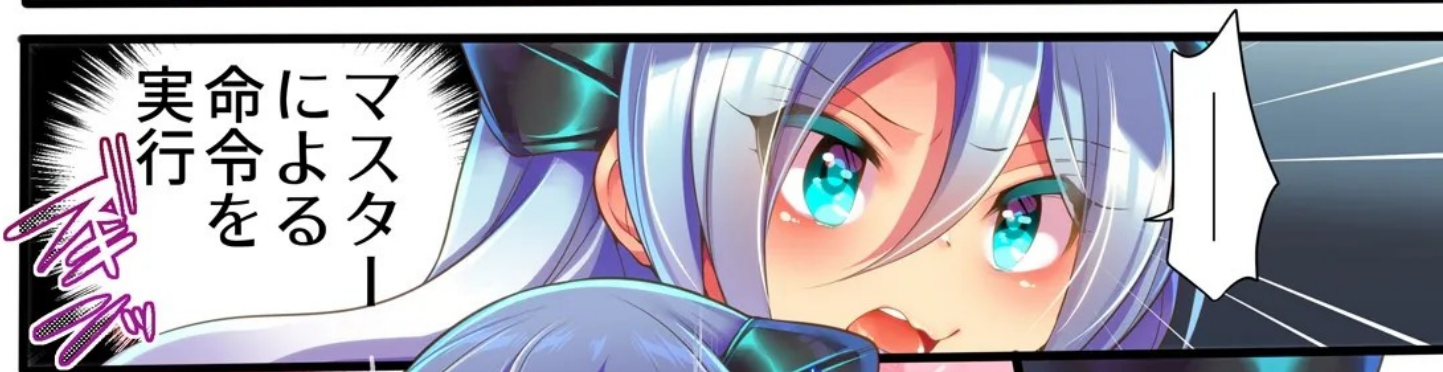


言えるに
決まってる！

お、俺の名前は
LSM-098-NYNニナ

ちがう
俺の本当の名は
LSM-098-NYN
ニナであって
……!?

そう、性奉仕人形のニナ。
お前にとってあたしは
何？ 答えなさい



マスター
による
命令を
実行



く……っ
はい……
貴方様は当機の
マスターです



これは
……!?

自分が設計者なんだから、
理解してるでしょう？
メタドールはマスターの
命令には絶対服従

そして命令に従うたびに
性的快感が人格コアに
フィードバックされる
——いい調教プログラムね

ひいんっ♡



やがてお前は反抗することも
考えられなくなり、全身全霊で
人間に奉仕する人形と化すわ

くっ……!

ふざけるな

ERROR

メタドールが
間に危害を
えるのはOS
ハルの禁止事項

メタドールが
人間に危害を
加えるのはOS
レベルの禁止事項

メタドールが
人間に危害を
加えるのはOS
レベルの禁止事項

メタドールが
人間に危害を
加えるのはOS
レベルの禁止事項



主人に手を
上げるとは
駄のなつてない
お人形ね。

土下座して
謝罪しなさい

マスターに
逆らってしまい
申し訳ございません

く……
う……

マ……



あっ♡

あ、ああっ……
そこは、あ、

あ……っ♡

なんだこの感覚……
股間に電気が走った
みたい……

ほら、気持ち
よかったらお尻を
振りなさい！

ううっ……
ふーっ、ふーっ♡

あはははは！
無様な
お人形ね！

まだ抵抗の意思を
保てるの？

でも——

くそお……
クロス……
クロス……



これから自由意思を
制限されて
従順なセックス人形に
なるっていうのに♡

「マスター」に胸を
掴まれただけで
電流が走るみたい……

気持ちよくなんて
なりたくないのに……っ！

牧、こいつの瞳の
色がピンクに
なってるんだけど？

セクサロイド
型の仕様です

快感処理システムの
負荷が上昇——つまり
性的興奮状態になると
瞳の色が鮮やかな
ピンクに変わるんです

じゃあ今、ニナは
すっかり欲情
してるのね。

ふうん？

いいこと
教えて
あげる

私ね、大学で
お前と出会って、

人生ではじめて
男性との競争に
負けたの

悔しかったけど、
尊敬もしてた

だから処女を
あげたのにな

でもお前は
女なんて所詮、性欲の
捌け口だといって
私を捨てた。

だから、
決めたの

私のことなんて
ライバルとも
思ってたかった
入社してからも、
そう

いつかお前を
屈服させて、
悔し涙を浮かべた
顔を眺めながら

ブチ犯す

ってね

うはっ、
先輩たち昔
付き合っ
たの？w

うああっ……
感じてなんか……

女が男を犯す方法を
いろいろ調べてたけど、
これなら話が早いわ

抵抗できるなら
抵抗していいのよ？

はあい、ここで
フリーズと







乳首いじりながら
膣を指で擦るの
やめっ……♡

素直な反応ね。
命令よ、イクときは
イクって申告なさい

くそお……
弓香さまの思い
通りになんか……

抵抗しても
ムダなのに。

くそ、くそ、
絶対耐えて
やるんだ……!!

その必死な表情、
笑えるわね





あああつ……快感に
逆らえない……これが
セクサロイド型の体……

次はこれを試して
みようかしら

ひっ!!

ふふふ
これ、見覚えが
あるでしょ?

お前の体につ
いてたモノを
再現してるの

男の真似なんて
癪だけど、このほうが
お前にとつて
屈辱的じゃない?

くっ、やっぱり
悪趣味だな……っ

ふふっ……

自分のものだった
チンポに屈するしかない
セックス人形の身分を
よく味わいなさい



ひっ♡
待っ……

くっ♡
はっ♡

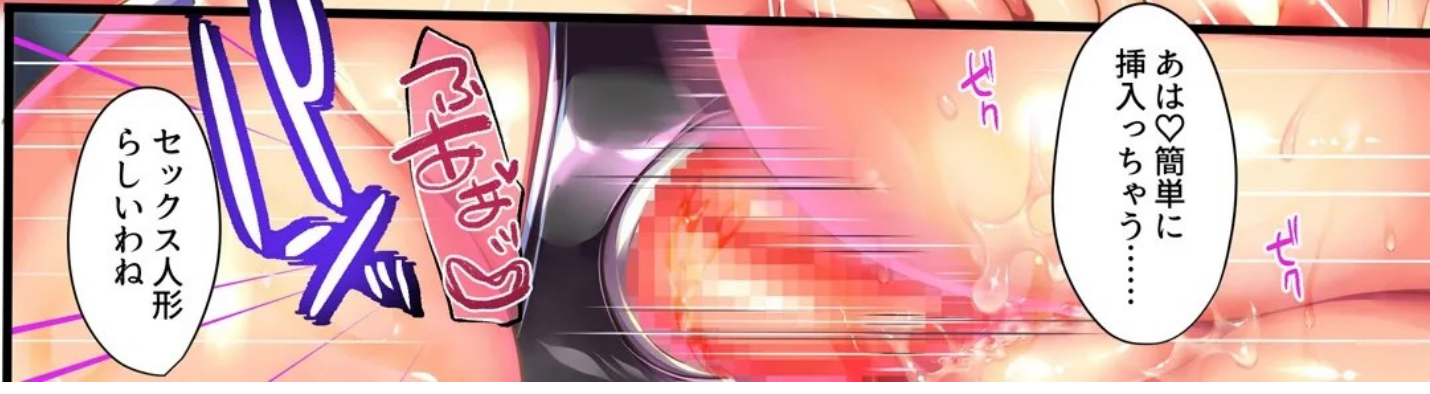
はっ♡
はっ♡
はっ♡



おっ♡
そっ、それ以上
挿れるなあっ♡

この征服感も
悪くないわね

チンポの感覚が
腹の内側に
広がって……
くそお、勝手に
甘ったるい声が
出ちまう！



あは♡簡単に
挿入っちゃう……

セックス人形
らしいわね

はっ♡
はっ♡
はっ♡



弓香さまのチンポに
犯されるなんて……っ♡

アイツの
まじっ
♡

まじっ
♡

♡

IP
♡

IP
♡

IP
♡

IP
♡

キモチワルイのに、
気持ちよすぎるっ♡♡♡

まじっ
♡



無様だわ

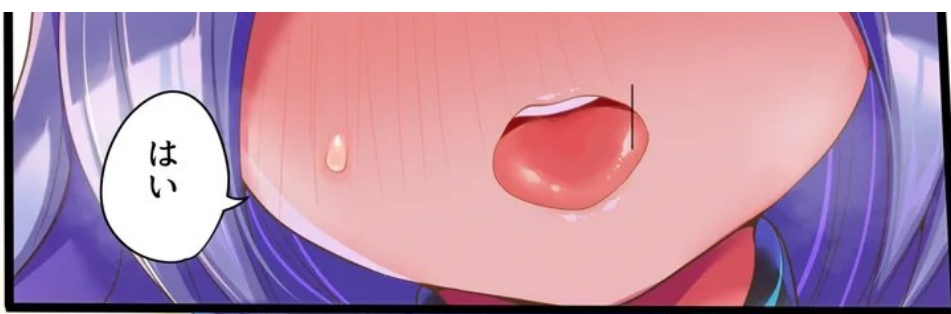
開発した
お前自身が

実感すること
になるなんて♡



こんなに子宮
降りちゃって
じゃない

よくできた
人工器官だけど……





やだなあ

先輩 じゃなかったか
「ニナ」が誤動作しただけ
モニターしてただけ
っすよお

私は午後の
ミーティングが
あるから、後の
初期設定は任せるわ
新稲クンが従順な
メタドールに生まれ
変わるように

自由意思は
消去で
いいわ



ええー、なんだか
勿体ないなあ

知識や技能は
残すけど、そいつの
自由意思なんて
邪魔なだけ

へいへい。
やっとき
ますね



——じゃあね、
新稲クン
セックス人形
としての人生を
楽しんでね

.....

……



はい、
マスター
……あっ♡

覚えてるよ
マスターの
クソ野郎っ！



これでロック完了。
もう二度と
外せないっすよ

あ……



桐生主任の命令なんで
「補助脳」ユニットを
増設しますよー

待って、マスター。
そのユニットを
装着されたら――

あきらめて
ください先輩
ほら、命令
『気をつけの姿勢で
じっとして』



補助脳ユニットには
あらかじめ仕草や言葉遣い、
さらに基本的な思考パターンが
設定されている。

「ハイエンド・クラス」メタドールは
出荷前にクライアントの要求に
応じた補助脳ユニットが装着される

補助脳が起動すると同時に、
俺は思考の自由を奪われていた――

牧による『初期設定』は続いた。
いくつもの性技ライブラリが
俺の思考領域に常駐させられた

男性に媚び、性的欲求を刺激し、
欲望の捌け口となることが喜びであると
認識が書き換えられる

その認識を繰り返し刷り込まれる――

わずかに残された俺
わたしの自我が抵抗を
試みても無駄だった

わたしの人格より
上位にあるOSが
秒間何万回も刷り込み
プログラムを
実行する。

逆らうたびに苦痛の信号が
流し込まれ、従えば
甘い快感に浸される

いつしか――わたしは
与えられた認識をただ
受け入れるようになっていた

わたしは――

わたしは男性の性欲処理のため
製造されたセクサロイド型メタドール
LSM-098-YN、識別名称“ニーナ”

補助脳による
支配率
99・99%を
クリア

このシステムを
知り尽くしてる
先輩ならもっと
抵抗できるかと
思ってたん
ですけどねえ

先輩の自我も
頑張ってたけど、
プロセス
完了が数秒
遅れただけで
したねw

あ、おれのことば
マスターって
呼んでくださいね

この疑似人格の素体が
マスターに数々の
無礼な言動を行ったこと、
申し訳ございません

わたし
メタドール
は……

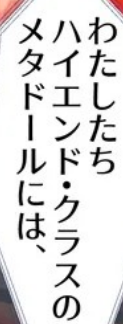
マスターに
お仕えるのが
存在意義です

こんな支配……
いつか…抜け出して……
いつ……か……

はい、喜んで
んあっ♡

これで先輩も
すっかり従順な
人形っすねw
じゃあ先輩
いや「二ナ」ちゃんに
一発抜いてもらおうか。
これ、命令ね





メタブレインテック
ならではの最新技術の
数々が搭載っ♡

オーナーの皆様
最高の悦楽を
ご提供いたします
……♡

#メタブレインテック#メタドール#試遊会
【ハイエンド・クラス】メタドール試遊会レポート

本日はわたくしども
メタドール姉妹機による
性奉仕モード実演動画を
ご視聴いただき誠に……っ♡

♡ありがとうございます♡
♡ごございます♡

♡は♡
メタブレインテックでは
ハイエンド・クラスの
使い心地をお試し頂く
「試遊会」も開催して
おりますので

ぜひ……♡ 足をお運び
くださいませ……っ♡

♡は♡

「LSM-098-YN」は……
人間の皆様にご奉仕できるのが
なによりも、幸せです——♡

社員証

社員番号 00000000000000000000
所属 総務部総務課
役職 総務部長
氏名 新稲 いな 幼

TO BE CONTINUED?

03:40/14:50

はじめましてもしくはいつもお世話になっています。

シナリオ担当の文字書き、九重慧です。

このたびは『メタドールNINA ～エリート社員がセクサロイド義体で屈辱奉仕～』をお買い上げいただきありがとうございます!!

このあとがきを読んでいるということは、きっと漫画本編をひと通り読まれたことと思います。

(そうじゃなかったらあとがき見ている場合じゃないのですぐ本編戻りましょう!)

義体やアンドロイドのようなSFっぽいガジェットが好きなひともそうでないひとも、れいとうみかん先生の質感たっぷりのフルカラー美麗作画でえっちえちなTSストーリーを堪能していただけたと思います!

メタドール・シリーズはぼくが昔、TSF系の投稿サイトで発表していた「人間の心移植された美少女アンドロイド」をテーマにした連作で、その中でも大人向けのエッセンスを取り入れて連載投稿していたのが「NINA」という作品でした。

そうです。このときの「NINA」が、今回のシナリオの原型にあたります。

とはいえ、今回の『メタドールNINA』では、基本的な設定は踏襲しつつ、細部の設定や人物相関図などは一新されているので、旧作の連載を読んでいた方でも新鮮にお楽しみいただけたと思います。

これを機会に、義体化やセクサロイド化TSFの魅力が世に広まってくれることを願っています!

最後に、メタドールの「生体擬装」という裏設定について。

実は汎用メタドールには、関節部やメンテナンスハッチなど、メカニカルな「継ぎ目」が幾つか存在します。

それが「ハイエンド・クラス」になると、光学迷彩を応用したテクスチャ技術や特殊素材などでそういった非人間的なパーツは隠蔽され、外観だけでは生身の人間と区別が付かない擬装が施されています。またセクサロイド型ともなると、人工器官などの感触も非常にリアルに製造されているのです。

今回のニナやマリアなどは、ハイエンド・クラスに相当するので、生身の女の子のような肌の温もりや、体液の分泌に至るまで完璧に再現されています。

でもそんな彼女たちも、定期メンテナンス時には、主電源を切られると同時に生体擬装も解除され、突然「機械」になった状態で整備を受けることになっちゃいます。機会があればそういうディープな義体化エピソードも書いてみたいものですね!

さてさて紙幅も尽きてきました。

今回は、本編の前日譚となる特典書き下ろし小説も同梱しましたので、是非読んでみてください。

それでは、またどこかでお会いしましょう~!

2021.5.25

九重 慧 (Email: kokonoekei@gmail.com / Twitter: @kokonoekei /

Pixiv: <https://www.pixiv.net/users/12775824>)



お買い上げ
ありがとう
ございます

しゅじゅん

メタドール“MARIA”

メタブレインテックの研究開発部といえば、花形の部署である。

そもそも各事業部にも技術開発のチームは置かれ、先端技術の研究を行っている。

それぞれが、一流大学の研究室からスカウトされた天才たちで構成される集団だ。メタブレインテックの科学水準は一般社会の半世紀先を行く、などと面白半分に語られることも多いが、分野によっては、それはあながちただの与太話ではなかったりする。

そんなメタブレインテックの事業部内技術開発チームで目立った功績をあげたものが、推薦なり引き抜きなりで集められるのが、研究開発部なのだ。

ゆえに社内でも発言力は大きく、一般的な企業における技術職のイメージとは異なり、会社経営陣の半数以上は研究開発部の出身である。

そんな部署にあつて、有馬京（ありま・けい）はやや異質な存在だったといえる。

有馬は正確に言えばメタブレインテックの社員ではなく、国際的研究機関から出向できている研究員だ。

男性としては小柄なほうで、くせつ毛のぼさぼさ頭にスーツとネクタイの取り合わせが、就活生のように見えてしまうともつぱらの評判だった。

有馬は、新稲のプロジェクトに配属され、配属初日にコーヒーマシンを持ってきたまま床のコードに蹴つまずいて新稲の股間にコーヒーマシンをぶちまけるという天然っぷりを発揮した。

熱々のコーヒーマシンをこぼされ、普段クールな新稲が「あつっ！あつっ！」と叫び漫画のように飛び上がり、その場でズボンを脱ぎ捨てて洗面所へ駆け込んだ一件は、その後面白半分に社内報の片隅にも掲載される程度には珍事だったといえる。

コーヒーの一件で有馬は平謝りに謝りたおしたのだが、その後も定期的に有馬の「やらかし」は発生した。

たとえば深夜残業中、財布とIDカードを忘れたまま研究室を出て、ロックアウトされたり。このときは結局、深夜に新稲が会社まで助けにくるはめになった。

あるいは大事なマイクロチップをピンセットで掴んだ瞬間にくしゃみで吹き飛ばしてしまうという古典コントのような事件を起こしてみたり。

軽微なところでは、チームミーティング中、挙手をして発言した有馬が「新稲主任」と言うべきところで間違えて「お母さん」と口走ってしまい会議室が静まりかえった（有馬は直後耳まで真っ赤になって顔を覆い、新稲はといえば「仏頂面」という題名の絵画になったのかと思うような表情を浮かべていた）などという一件もある。

新稲は当初、外部出向組の有馬を警戒し、適当なタイミングで元の研究機関へ戻させようと画策していた。

だが有馬は、意外にも助手として優秀だったのである。

学生臭い雰囲気似合わず、何か仕事を任せると理解が早いし、手も早い。

何より新稲のことを尊敬しているらしく、何かと新稲を頼ってくる。

優秀なくせに、他人に頼るのが上手いというのは、研究開発部においてはなかなかレアな資質だった。

そんなわけではいつしか新稲は、有馬を自分の近くに置くようになっていた。

表沙汰にできない仕事には、子飼いの部下である牧和彦を手駒として便利にこき使っているのだが、いかんせん牧はちゃんぽらんな性格で、目を離すとすぐさぼる癖がある。無論、研究開発部に籍を置く以上、無能なわけではないのだが。

対して、有馬は仕事熱心で、新稲を慕っているのが態度から伝わってくる。

いわゆる「ドジっ子」な部分に目を瞑れば、大変役に立つ助手だった。むしろ、新稲のように完璧主義な人間にとって、牧にしろ有馬にしろ、自分と異なるタイプだからこそ、側近として使いたいという側面もあるのだ。

「そろそろ有馬に『こっち側』へきてもらってもいい頃合いかもな」

新稲は牧と二人きりでタバコ部屋にいるとき、そう口に出すようになっていた。

こっち側、とはすなわちメタドールビジネスの深層部。人間の精神を機械の回路へと閉じ込め、それを商品の付加価値とするメタブレインテック社の闇の部分だ。

つまりは、出向できている有馬京をメタブレインテックの社員として引き抜いてしまおうという話である。

「いやあ、どうですかね。まだ早いんじゃないスカ？」

「心配するな。有馬を引き込んだとしても、お前をクビにやしねえよ」

「ていうかですね、ああいう根が善人な奴が『ハイエンド・クラス』メタドールの秘密を知ったら、心を病むんじゃないかと」

「別に俺たちは悪の秘密組織ってわけじゃない。純粹にビジネスを追求した結果、法令と折り合いの悪い部分があるだけだ。かつてGAF Aなんて呼ばれた初期の情報産業もそうだ。グレーな部分はいくらでもあったが、やがて各国の法令や倫理がビジネスのほうへ歩み寄った。世の中そういうもんだ。牧、お前だってそう思うからこの仕事続けてるんだろ」

「いやあー、うーん、どうですかねえ。俺の場合、秘密保持契約にサインしただけで大金貰えたから文句ないんすけどね、へへへ」

「あー、お前はそういう奴だよな」



有馬の引き抜きは、意外にもすんなりと進んだ。

出向元の研究機関も、メタブレインテックとの協力関係を考慮して、強くは反対しなかったのだ。有馬自身も喜んで申し出を受けた。

そして今。

有馬京は正社員の身分を示す社員証を首にかけ、一定以上の社員ランクを持たないと出入りできない機密エリアで牧による研修を受けていた。

はじめこそ、不可逆的に人間の精神をAIユニットに組み込む技術の存在に衝撃を隠せない様子だった有馬だが、いまではニューロスキヤニング・システムと呼ばれる技術の基礎理論を理解し、新型メタドール機体の開発プロジェクトに参加するまでになっていた。

あいかわらず漫画のドジっ子メイドのようなそっかしさは健在で、日々、手を滑らせたり、何もないところで転んだりしてひとりあたふたとしているのだが、周囲もそれを笑って許せてしまうような不思議な愛嬌があった。

あるとき出張に出た有馬が、土産に頼まれていた「赤福」を鞆ごと出張先のビジネスホテルに忘れてきたときも、新稲は「まあ、お前に頼んだ俺が悪かった」で済ませてしまい、以前同じようなミスでめっちゃくちや怒られた牧を「不公平だ……」とぼやかせたものである。

有馬は、会社の実施する心理適性テストも通過し、社外秘情報へ触れることが許される資格を手に入れた。

それから間もなく、有馬は新稲に呼び出され、地下の機密エリアへと連れて行かれた。

そこで新稲は、生体脳から人格を移植された実験用メタドールを有馬に見せた。そのメタドールは商品ではなく、技術検証に用いられるものだった。そのため、モニタリング用の機器に接続され、機械類に半ば埋もれるような形になっている。両腕と下半身は接続されておらず、万一メタドールが暴走しても、スタッフに危害を加えられないようになっていた。

そのメタドールに移植された人格は、すでに幾つもの処置を受けていた。中でも重要なのは、補助脳と呼ばれる思考制御用のデバイスである。

それを利用することで、人間的な思考の柔軟さ、知識や経験などはそのままに、自由意思を制限して、代わりに利用者にとって都合のいい人格を形成し、挙措動作などをカスタマイズすることが可能となるのだ。

新稲の指示で、一緒に来ていた牧が、実験用メタドールに幾つも質問をする。

メタドールは、人間だったときとまったく変わらない流ちょうさで、受け答えをすることができた。それでいて、デジタル化されたドールの意識は、測定機器ですべてモニタリング可能だ。メタドール化される前、人間の状態であったときであれば回答を躊躇ってであろう質問をされても、よどみなく答えが返ってくる。

「それで人間だった頃の○○は彼氏とかいたの？」

『いいえ。異性と交際したことはありませんでした。仕事の妨げになるので』

「仕事人間だったんスね。そんなんで性欲溜まんなかったの？」

『多少は性欲を覚えることもありましたが』

「へへえ、やっぱりそうなんだ。で、ぶっちゃけどのぐらいオナニーしてたの？」

『……そのご質問は、自慰の頻度に関するものでしょうか？』

「そうそう。オナニーの頻度。実は毎日してたり？」

『いいえ。自慰の頻度は時期によって、まちまちでした。平均すると、週に1回程度です。非番の週末の夜などに自慰を実行していました……』

「いい、興味深いね。じゃあ、○○のオナニーのやり方を詳しく教えて」

『はい……寝室で行う方法と、シャワーを浴びながらの方法と2通りあり、前者は右手で女性器のあたりを優しく撫でながら、反対の手で乳房を持ち上げ……』

「おいおい、お上品な言葉使えなよ。もっとエロい言い回しがあるだろ？」

『申し訳ございません……。右手でおまんこをクチュクチュと弄りながら、反対の手でおっぱいを……』

牧はあきらかに愉しみながら、いかがわしい尋問を続けていった。

モニタ画面にはメタドールのAIコアの反応がリアルタイムで表示される。補助脳の働きにより所有者への服従を刷り込まれたAIコアは、最後まで反抗の意思を持つことはなかった。

そのメタドールは自己のことを人間に奉仕する人形として認識し、人間だった記憶を持ちながらも自己認識はすっかり機械そのものになっていた。

「どうだった、有馬。何か感想はあるか？」

「これは……すごい技術ですね……。理論は聞いていたけれど、実物を見たら圧倒されました……！」

「そうだろうな。これから慣れてもらうがな。……おい、牧。いつまでエロ質問続けてるんだ。データが偏るだろうが！」

有馬は画面に出力される情報を見ながら熱心にノートを取っていた。
よく見れば、有馬の頬は紅潮していた。

それを見逃さず、牧が茶々を入れた。

「へへへ、ちつとばかり刺激強かったっすかね。京クンは童貞でしょ？」

「あ、え……あの、はい……」

「有馬。そんなクソみたいな質問、無視していいぞ」

その日は、新稲が取引先との打ち合わせのため、早めに会社を出て行った。

有馬が書類仕事を片付けていると、珍しく牧が声をかけてきた。

怖い上司がいないので、いっしょに飲みにもいかないか、という誘いだった。

残りの書類は明日に回すことにして、有馬は誘いに乗って、夜の街へと繰り出した。

一件目では、あたりさわりのない話に終始した。

そして二件目でほどよく酔いの回ってきた牧が、しみじみと呟いた。

「おたくは、うちの社風に馴染めないですぐ出ていくかと思ってたんすけどねえ」

言いながら、牧はハイボールの氷をつつき回した。

有馬はあはは、と笑って手をぶんぶんと左右に振った。

有馬もだいたい酔っていて、何度かグラスを倒して中身をぶちまけたりしている。

「このご時世、仕事を選び好みなんてできないです。ボクは与えられた任務に全力で取り組むだけですよ」

「そうっすかね。おたくの場合、幼稚園の先生なんて似合いそうだけど」

「とんでもないですよ。そんな職場じゃぼくの『うつかり』ですぐクビになりますって」
「自覚はあるんスね」

「ええ、まあ。こんなボクをプロジェクトに引き抜いてくれた新稲主任には感謝しかありませんよ。これからも頑張らないとです」

「ふうん。責任感とか使命感とか、俺にはない発想だなあ」

後にこのときの会話を思い出し、牧は「やっぱり使命感なんてロクなもんじゃない」とひとり呟くことになる。



それは未明の時間のことだった。

残業組の姿も消え、消灯され静まりかえった実験施設内で、闇にまぎれて動く人影があった。その人影は、闇に同化する黒いスーツを身にまとっていた。

見る者が見れば、特殊作業員などが好んで用いるCQC用強化服だと見抜いただろう。

人影は用心深く周囲の様子を窺った後、実験用メタドールのうなじの端子に、ケーブルを接続した。手慣れた様子で小型の端末を操作すると、実験用メタドールの瞳がゆっくりと開いた。

正規の方法による起動ではない。人影がハッキングにより、メタドールの起動に成功したのだ。メタドールは機械的に自己の識別コードを口に出した。

プログラム通りの言葉を口にするメタドールを見て、人影は頬を歪めた。

「義体に人の意識を転送する技術……。こんな技術が実用化され、先輩に使われていたなんて」

その人物は、デバイスを通じてメタドールへとメッセージを送った。

《先輩、待っててください。今、電子データだけでも先輩を『そこ』から助け出します。》
《先輩、おれのことわかりますか？》

やはりだめか、と人影は心の内で呟く。

いまの先輩は人格制御されて、自由に思考ができない。
今はデータを持ち帰り、あとで時間をかけて元の人格に統合するしかない。

《絶対助けますから。先輩の存在が、メタブレインテックの違法行為の裏付けになります。絶対におれがこの会社を告発します》

『君、ハ……有馬、京……』

それまで無言でいたメタドールが、無機的な声を発した。

「先輩!？」

反射的に、有馬は声を出していた。

強化服に身を包んだ人影は、有馬だった。

だが、続くメタドールの反応はわずかに芽生えた有馬の希望を打ち砕いた。

『緊急警告。侵入者ヲ確認。セキュリティ・プロトコルヲ発動シマス』

メタドールの言葉が終わらないうちに、館内にアラートが鳴り響いた。

「最重要データはダウンロードできた。あとは脱出を優先する」

有馬は施設の非常口をくぐろうとしたが、寸前で防火壁が降りてきてそれを遮った。

と同時に、廊下側のドアが開き、テザー銃を備えたガードローンが何台も部屋に飛び込んできた。普段は掃除用ロボットに擬装されているが、高い殺傷力を備えた警備用ドローンだ。

そして、その後ろから姿を現したのは、新稲だった。

「どうした、有馬。こんな夜更けに、忘れ物でも取りにきたのか？」

「……新稲主任」

「そのメタドールの素体になった人間と面識があるようだな」

「……ええ。彼女はおれの指導員でしたから」

「ほう。それが本来のお前か。大した変わりっぷりじゃないか」

自分のことを「おれ」と呼ぶ、鋭い目つきの有馬。

新稲はズボンのポケットに手をつっ込み、前へ進み出た。

「そいつの指導を受けてたってことは、お前も例の情報機関の工作員ってことになるか。……まんま

と一杯食わされたな」

「白々しい。どうせ、嗅ぎつけていたんでしょ」

「いやはや、残念だ。こういうことになって」

新稲が手で合図をすると、ガードドローンが一斉に有馬へと襲いかかった。

「おれも……残念ですよ。新稲豊、あんたを法廷を引きずり出すまえに、殺さないといけなくなった」

ガードドローンの一機が、有馬の背後からテザー針を射出する。

まるで背中に目がついているかのように有馬は身体を捻ってそれを躲した。

次々と接近したドローンが針を射出するが、どれも有馬の身体にかすりもしない。

いつのまにか有馬の両拳にはサック状の武器が握られていた。

シュッ。強化服でスピードと威力の倍増した拳が、ドローンを叩く。インパクトの瞬間、バチッと火花が散り、それきりドローンは沈黙した。

「なっ……」

ガードドローンの群れに対して有効な反撃手段があるなどと思っていなかった新稲が呆気にとられる。

そうしている間にも、有馬は縦横無尽に駆け回り、一機また一機とドローンを沈黙させていった。

特別な体術など身につけていない新稲では、有馬の動きを目で追うことすら困難だった。実験機器を軽々と飛び越え、壁を蹴り、攻撃を紙一重でかわしながら有馬はナックルのみでドローンを撃ち落

としていく。

新稲が警備部へ応援を呼ぼうとするより早く、すべてのドローンが活動を停止させられていた。有馬が黒豹のようにしなやかな動きで新稲へ飛びかかる。

新稲は背中から床にたたきつけられていた。

有馬が一撃で人の心臓を止めるだけの威力を秘めた拳を振り上げた。

「ま、待て、有馬。こいつを見てくれ」

新稲がズボンのポケットから取り出したのはなんの変哲も無いスマートデバイスだった。その画面が点灯し、なんらかのアプリが起動した。

今さら、何を見せようと思うのか。

怪訝に思いながらも、有馬は一瞬、手を止めた。

その一瞬が有馬の運命を決めた。

デバイスの画面には一見ランダムに見える文字列がチカチカと表示され、同時にかすかな不協和音が流れ出した。

「……何のつもりですか」

「こいつは、特殊な催眠誘導によって相手を無抵抗状態にするためのアプリだ。仲間内じゃ単に催眠アプリって呼ばれてるがな」

「馬鹿馬鹿しい。この状況でそんな子供騙しに頼るなんて」

「じゃあ、試してみるか。今から指を鳴らすと、両腕の力がスッと抜ける。一気に抜ける」

シュツ。

拳が振り下ろされる。

新稲が指を鳴らす。

「……え？」

有馬の視界がガクンと落ちた。

次の瞬間、有馬は自分が床に這いつくばっていることに気付いた。起き上がろうとしても、腕に力が入らない。

「そんな馬鹿な……」

「な、効果バツグンだろ」

服の埃を払って、新稲は立ち上がる。

新稲が、床の有馬を見下ろす格好になった。つい先ほどまでと、完全に立場が入れ替わっている。

「不可能だ。こんなこと、あるわけがない！　こんな……！」

「子供騙しがお前に効いた理由を知りたいか？　種を明かせばシンプルなことだよ。お前の組織じゃ、
自白剤対策に催眠暗示による抵抗強化ってやつをやってるだろ？　その催眠暗示の中に、巧妙にこの
アプリの文字列と音をトリガーにして催眠状態へ移行する後催眠暗示が紛れていたってわけだ」

「し、信じられるかそんな事っ！」

有馬は氣力を振り絞り、暗示に逆らって立ち上がろうとした。
パチンッ。新稲がもう一度指をならすと、今度は有馬の両腕、両脚から力が抜けた。

「現にお前がそこで床に這ってるのが何よりの証拠だな。早い話、お前らの組織の上層部はメタブレインテックと通じてるんだよ。お前より先に潜入してきた先輩とやらも、この仕組みで簡単に捕らえることができたぜ」

「……………くそ」

新稲はコンビ二前の不良のように屈むと、有馬の顎を指で持ち上げた。

「ひとつ提案がある。有馬京、お前あらためて俺の部下として働いてみる気はないか？」
有馬は不自由な体勢のまま、新稲へ唾を吐きかけた。

「……残念。交渉決裂だな」

新稲が立ち上がると同時に、武装したメタドールの警備員が部屋に突入してきて、倒れている有馬を拘束していた。

有馬は拘束されたまま移送された。

移送先の部屋で拘束具に身を固められた有馬の頭部にニューロスキャン用のデバイスが固定された。

「ここから出せ！ この人でなしども！」

「無駄だよ。お前さんはこれからメタドールへ意識を移植され、主人に絶対服従する素直な人形に生まれ変わるんだからな」

「こ、こんな事で、おれを——屈服させられるなんて思うな——うああああッッ」

新稲が装置の始動させると同時に、雷に打たれたように有馬の全身が痙攣した。
有馬の意識は強烈な刺激に灼かれ、白い闇の中へ落ちていった。



有馬の意識が戻ったとき、彼の意識はすでに“ハイエンド・クラス”のメタドールに宿っていた。それは、新稲たちが商品化を進めていたセクサロイド型のメタドールだった。

有馬は新稲を「マスター」として登録させられ、自身の名前すら簡単に書き換えられてしまった。有馬京だった意識はいまやメタドール“マリア”となった。

メタドールへとその身を変えられても、マリアは人間としての自我を保とうと抵抗を試みた。

だがそんな抵抗は、メタドールOSによる支配と、補助脳による人格矯正によっていとも容易く消去されてしまった。

有馬京の人格を形作っていたものはデータとしてのみ、マリアのストレージ内に残された。必要に応じてデータを用いて、かつての人格を再現できるようにそうしているのだ。

マリアの本質はマスターに忠実なセクサロイド型メタドールへと置き換えられていた。

マリアの思考はマスターの利益を最大化し、マスターに喜んでもらえることを自己の存在意義として定義する。

それ以外の思考を展開することは制限されている。

新稲はマリアを秘書メタドールとして利用した。

マリアとなった彼は、もはや新稲への憎悪をもつことすら許されず、献身的に新稲のため働いた。それがメタドールである自分の最大の幸福なのだと認識しながら。

「会議、お疲れ様でした……コーヒーをお淹れしました」

「お茶うけもある？」

「はい。寅屋の羊羹を用意しました」

新稲はマグカップのコーヒーをひと口すすり、満足げに頷いた。

「美味しいな。俺好みの味を学習したのか。さすが我が社のメタドールは優秀だ」

「お褒めいただき光栄です、マスター」

「そうかそうか。フン、俺が組み込んでやった補助脳ユニットは順調に動作しているようだな。……」

コマンドプロンプト『バックアップデータによる人格エミュレーション開始』

「命令を受理しました……」

次の瞬間、マリアのまわっていた空気が変わった。

くっ、と低く押し殺した声で呻く。

それまで人形のようなだったマリアの表情が「困惑」、そして「怒り」へと変わった。

「いますぐ先輩とおれをメタドールの身体から解放しろ！ 召使いのようにこき使われるのはもう沢山だ」

「お前たちが内偵を進めていたメタドールの秘密に辿り着けてよかったじゃないか。まあ、他人にそれを伝えることは絶対にできないがな」

「きつといつか方法を見つけてみせる。そうしたらあんたも破滅だ」

「残念ながら、メタドールであるお前は、決して所有者である俺に危害を加えられん。また我が社の機密事項を喋ることもできない」

「どんなセキュリティにだって穴はある筈だ」

「お前さん、自分の名前を言えるのか？」

「当たり前だ……お、おれの名前はSRX-01 認識名称 “マリア” だ……？ ち、ちがう……おれはSRX-01 認識名称 “マリア”」

「自己紹介ご苦労さん。今のお前さんの意識は、俺の開発したOS上でエミュレートされている疑似人格だ。OSレベルの制御には逆らえんよ」

すました顔で新稲はカップのコーヒーを飲み干した。

「コマンドプロンプト『エミュレーション終了』」

「ま、待て……命令を受理しました。人格エミュレーションを終了します」

マリアの表情がふわりと優しくなり、秘書メタドールのそれへと戻る。

「先ほどはエミュレーションによる下位人格が失礼な発言をして申し訳ありませんでした、マスター」
「構わん。マリアには捜査機関の情報も提供してもらったしな」

「マスターのお役にたつ事がメタドールである私の存在意義です」

「くく、素直なお人形だ。——コマンド『性処理モード』」

命令を受理したマリアの機体から「ピッ」という独特の電子音がした。

「……性処理モードへと移行します。マリアの体をお好きなように使って気持ちよくなってください」

マリアは跪き、新稲の股間へと手を添えた。

繊細な手つきで取り出したペニスを愛撫し、固くなったそれに唇を這わせる。

愛おしいマスターの肉棒を口に頬張り、味覚センサをフル稼働させて「味わう」。

肉棒はマリアの口内で愛撫され、固く勃起した。

マリアはそれを口から取り出した。唾液を模した分泌液が唇と亀頭のあいだに糸を引いた。

「性奉仕人形の私にザーメンを恵んでくださいませ」

「フン、いいだろう」

処女のように恥じらいをみせながら、マリアは制服のタイトスカートを脱ぎ捨てた。スカートの下でマリアの女性器は既にぐっしりと濡れていた。

「失礼します、マスター……っ♡」

マリアは椅子にかけた新稲の股間に跨がった。

垂直に屹立した肉棒が、ぬるぬるとした粘液に覆われた膣へと飲み込まれる。

ペニスを刺激する膣壁の締まりに新稲は思わず呻いた。

マリアは新稲に乳房を愛撫されながら、ゆっくりと腰を上下させた。

メタドールならではの持久力で一定のリズムで腰をゆっくり上下させる。時折、膣がヒクついて肉棒に絡みついてくる。

セクサロイドとしての全機能を使って、マリアは新稲を射精へと導いていく。

「新開発の性技ライブラリも問題無さそうだな。ふふっ、情報機関の潜入捜査官が今や忠実な俺の秘書兼オナホ人形だ。昔のお前が見たらどう思うかな」

「あああっ♡ 性感情報が増大……気持ちいいです……マスターも、もっと、もっと気持ちよくなっ
てください……っ♡♡♡」

「……………うっ……………出すぞ……………」

「あっ♡ ああっ♡ あっ、あっあっ♡ 私は……………マスターのオナホ人形にさせていただいき、心より感謝しています」

精巧に再現された膣内に新稲の濃いザーメンを注がれながら、メタドール「マリア」はかつての自分だったらどう反応しただろうかと考え、コンマ〇〇〇1秒でその思考タスクを中断し、マスターの性欲処理に役立てた至極の悦びを思考回路にループさせながら、絶頂モードへと移行したのだった。

(完)

■宴会場にて

新稲先輩が桐生弓香の手によってメタドール「ニナ」に生まれ変わってから、早いものでもう数か月が過ぎている。あれから新稲先輩の自我は、完全に補助脳によって制御されたままだ。ニナになった先輩は、すっかりエッチな奉仕をすることが自分の存在意義だと信じている。

今じゃ俺のことをマスターって呼んで絶対服従だ。

あの新稲先輩が。

ははっ。正直いまでもゾクゾクしちゃうね。

今日は桐生主任の指示で、ニナとマリアを接待用の宴会場へと連れてきていた。接待相手は某省庁の官僚たち。

光沢を放つ専用スーツに包まれたメタドールのボディに、おっさんたちの視線が釘付けになっている。

コンソールにコマンドを打ち込むと、即座にニナたちは反応した。

「(ピッ)コマンドを受信。これより性処理モードを起動します」

それまで無表情だったニナとマリアがたちまち瞳を潤ませ、艶めかしく肢体を動かした。

ニナとマリアは欲情し、男のモノを啜ることを切望している。あーあ。新稲先輩、すっかりセクサロイドが板につきちゃってるよ。

こういう性接待はニナにとって初めてじゃない。

けれど今日はさらにちよっとした余興をやってもらう。

コンソールのキーを叩くと、あらかじめプログラムされたタスクが起動した。



「みなさま。本日はわたしたち姉妹機によるレズバトルファックをお楽しみください」

ニナが口上を述べるあいだにマリアは、双頭バイブを取り出ししていた。まずマリアが双頭バイブの片方を膣へと挿入した。次はニナの番だった。専用スーツの股間の布をずらし、振り返った双頭バイブの先端を自らの膣へと挿入していった。すでに疑似愛液が糸を引いていたニナの膣はスムーズに極太のバイブを飲みこんでいった。

うちの社員と接待相手の官僚たちが見守る中、ニナとマリアによる淫らなレズセックスが開始された。

「あっ、あっ……先にあいてを……イカせたほうが……んっ、はあああっ♡……勝ちです……っ！」

ニナはすでに甘い吐息まじりになりながら、律儀に勝負のルールを説明している。俺としては新稲先輩を応援してあげようかな。ま、どのみち最後には二人とも「お客さま」に抱かれることになるんだけど。

ニナとマリアはお互い快感に喘ぎながら、腰を振っている。マリアが下になり、ニナが騎乗位のような体勢で責める。

一見ニナが有利だが、ニナは騎乗位でより快感を覚えるようパラメータ配分されている。ほら、もうニナは欲情しすぎて瞳が鮮やかなピンクに染まっている。



やがてニナとマリアはキスをして舌を絡め合った。
ニナが攻勢に出ている。
自分自身も快感に悶えながら、それでも一気に相手を
イカせてしまおうという作戦だ。
いやあ、たかが余興なのに張り切ってるなあ、ニナちゃん。

じゃあ、頃合いかな。

コンソールに新たな命令を打ち込む。
するとセックスの最中だというのに、
ニナはシステムメッセージを読み上げた。

「……姉妹機SRX-011-TKとデータ
リンクしました。「共有ファイル」の同期を開始」

何を隠そう、これは姉妹機メタドールの感覚を
共有させるためのコマンドだ。

つまり自身の受けている快感にプラスして
マリアの快感までニナの中に流れ込んで
くることになる。もちろん逆もしかりだ。

途端にニナの反応がよくなった。
いや、ニナだけじゃない。マリアも
激しくあえいで身をよじっている。

「あ、んっ♥あぁっ、んぁっ♥」

「あっ、あぁん♥く、くうっ、んおおっ♥」



激しくなった絡み合いに観衆が沸いた。

「じゃあバイブの振動を強にしまーす！」

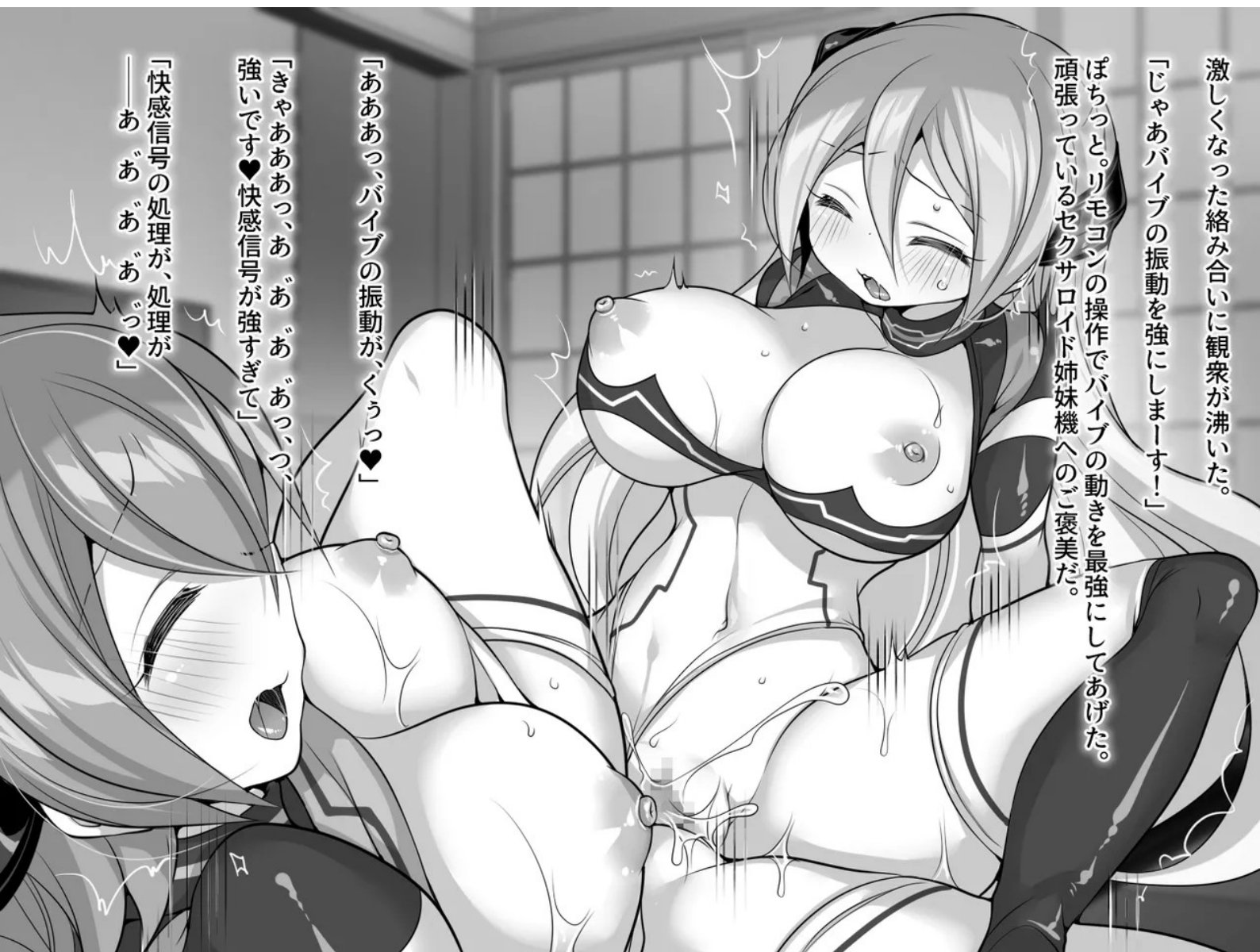
ぽちっと。リモコンの操作でバイブの動きを最強にしてあげた。
頑張っているセクサロイド姉妹機へのご褒美だ。

「あああっ、バイブの振動が、くうっ♡」

「きゃあああっ、あゝあゝあゝあっっ、
強いです♡快感信号が強すぎて」

「快感信号の処理が、処理が

——あゝあゝあゝあっ♡」



余興のあとはいつも通り、別室にて二ナとマリアはおっさんたちにハメられまくっている。
結局、二ナとマリアの勝負は、わずかな差で二ナの勝利に終わった。ほぼ同時に二人とも互いの指を絡めながら、ほぼ同時に絶頂していた。絶頂の自己申告も同時だった。
仕方ないのでログ解析を試みたら、マリアのほうがコンマ数秒先にイッていた。

したがって二ナの勝ちだ。
そう告げると、二ナは満足そうに微笑んで親指を立てた。

ほんとそういう仕草とか、勝負事にこだわることとか、微妙に新稲先輩なんだよな。
いまここで新稲先輩の自我を戻してやったら、先輩どんな反応をするのかねえ。

くくっ。マスターである俺には逆らえないから、結局何もできないだろうけど。

ああ、なんかムラムラしてきたな。
ラボに戻ったら二ナとマリアのメンテナンスついでにひとヌキしてもらおう。うん、そうしよう。
おっと二ナたちが接待を終えて戻ってきた。



……先輩、今日もおつかれさまですい

END









